

西行の眼

下村湖人

青空文庫

憤怒に打ち克つもの、それはただ慈心のみである。世に、対立を超
越したもののほど、尊く、高く、かつ強きものはない。

平安朝もおわりに近いころ、北面の武士から、年わかくして仏門にはいった二人の偉丈
夫があつた。その一人は佐藤義清のりきよ、もう一人は遠藤盛遠もりとおである。義清は二十三歳、盛
遠は十八歳で剃髪した。前者は一所不住の歌人西行さいぎやう、後者は高雄神護寺の荒行者文
覚もんがである。

おなじく仏門にはいつても、二人の心境は、火と水のようにちがっていた。文覚が、燃
ゆるがごとき情熱と、怒濤のごとき意力とをもつて自己を鍛錬しつつ、つねに世の動きに
関心を持ち、頼朝のために院宣を請うたり、天皇廃立の不軌を企てたりしたのに反して、
西行は、豪宕ごうたうの性をもちながら、一杖一笠、しずかに自然を友として嘯咏自適、あたか
も銀盤に秋水をたたえたような清純な生涯をおくつたのである。

文覚にいわせると、西行は仏門の賊であつた。「沙門のくせに、行雲流水を友として、四方に周遊し、吟詠に日を送つて、衆生済度の心を失つてゐるのは怪しからぬ。」というのが、彼の腹であつた。そして、いつも口癖のように、「西行に会つたら、頭をたたき割つてやる。」と豪語していた。

一方、西行は、文覚のことを別に何とも思つていなかった。ただ、高雄に文覚という荒行者がいるそうだ、旅のついでに逢えたら逢おう、ぐらゐに考へているだけであつた。そして、文覚が、まだ見たこともない自分を、腹に据えかねていようななどは、夢にも思つていなかったのである。

ところが、二人が出つくわす機会がついにやつて来た。ある秋のゆうべ、西行は、その巨大なからだを寒そうな衣につつんで、のっそりと神護寺の門をくぐつたのである。

西行の訪れたのを知つた文覚の胸には、たちまち黄臭い煙きなが渦巻いた。今日こそは、いよいよ西行をぶちのめす機会が来た、と彼は思つたのである。

やがて二人は一室に対座した。

文覚は、嘗て伊豆かつに流されていたころ、頼朝にはじめて面接した時のように、目を瞋いからしてじつと西行を見据えた。その瞳からは、焼けつくような炎がほとぼしした。

これに対して、西行の眼は、水のように澄んでいた。文覚の眼から出た炎は、西行の眼の近くまで行くと、ひとりでに熱気を失った。しばらくするうちに、文覚は、自分の眼そのものまでがつめたくなつて行くのを感じた。いや、冷たくなるというよりは、何か眼に見えない柔かいもので、自分の顔から、一切の毒気と熱気とを拭い去られるような、心地よさを感じた。同時に、彼の胸のなかに渦巻いていた黄臭い煙も、何処へやら消えうせて行つた。そして、室にみなぎるものは、秋のゆうべの、うつすらとした寂しずかな光のみであつた。

かなり永い間、二人はその寂光のなかに、二つの温かい石像のように坐つていた。

やがて文覚はしずかに眼を落し、頭をたれて、西行に仏の道を問うた。それから二人のほがらかな話声が永いこと室外にもれて、文覚の弟子たちの耳をそばだてさせた。

西行が、再び瓢然として、その寒なそうな姿を神護寺の門外に運び去つた時、弟子たちは、かねての豪語にも似ぬ文覚の態度を詰なつた。

文覚の答は、しかし簡単であつた。

「西行はわしに殴られるような男ではない。わしこそ、うんと西行に殴つて貰わねばならぬのじゃ。」

仏門にはいったからには、西行のように、一切の名利を捨てて一所不住の生活をするのが本筋なのか、それとも、人間であるからには、文覚のように、あくまでも人を動かし、世と戦うことを忘れてはならないのか、それは、しばらく別として、ここでわれわれの考えて見たいのは、二人の魂の落ちつくどころである。火のような文覚の眼と、水のような西行の眼が、何を意味するかである。

文覚には強い自我があつた。彼は、あくまでも自分を忘れることが出来なかつた。そこが彼をして、自己克服のために、すさまじい荒行を行わしめた理由でもあり、彼の偉さもまたその点にあつたのである。が、結局、彼は西行ほどに徹底して自己を克服することができなかつた。彼は、彼の周囲に対してつねに怒を感じた。自己を確立せんとする心は、たえず自己と他人とを対立せしめた。こうして彼は、西行の頭を叩き割ろう、とさえ思ったのである。彼の眼は、おのずと赤黒く燃えあがらざるを得なかつた。

西行にも、無論、自我はあつた。しかし、彼の自我は天地と共に生きる自我であつた。草木虫魚とともに喜び、かつ悲しむ自我であつた。それはいつも、水のようにさらさらとながれていた。ちよつと見ると力がないようでも、それは大地にしみ徹る自在無礙なるも

のであった。そこに、彼の眼が水晶のように静かに澄みきっていたわけがあるのである。こうして、文覚の眼はついに西行の眼に克服されたが、それは、怒り、争い、打ち克たんとするものの心が、怒りと争いと勝敗とを超越したものの心に対して、如何に弱いものであるかを物語るものでなくて何であろう。

考えて見ると、今の日本は、文覚の徒が多過ぎる時代である。右を見ても、左を見ても、小文覚がうようよしている。それらのある者は、どこやらの赤い法衣を着ており、またある者は、どこやらの黒い法衣を着ている。そして彼らの眼は、一ように火のように燃え立つて、あたりにいる者の頭を叩き割ろうとしている。彼等は静けさを好まない。静かに中道を歩もうとする者でさえ、かれらの怒りをさけることが出来ないのである。

こうした時世では、西行の眼を持つ人が、一人でも多く現われることが望ましい。

無論、今の世に、西行の眼を持つ人が全くいないのではない。しかし、悲しいことには、えせ文覚の徒があまりに多過ぎ、しかも彼等は西行の眼をしみじみと見ようとはしない。文覚ほどの修行を積んでいない彼等は、非常に無知であり、しかも卑怯である。彼等は西行の眼に十分ものをいわせるまえに、はやくも敵呼ばわりをする。そして背後から、西行

の眼をもつた人たちの頭を叩き割ろうと企らむのである。

だから、西行の眼はもつともつと多くなければならない。でなければ、尊い人間の道がすたれる。日本はこの数年来、似て非なる文覚の徒の出現によって、すでにある程度の修羅場と化してしまった。そして、危険はさらに刻々加わろうとしている。われわれは、愛国や民衆の名において、人間の道をけがす奇怪な人物が各所に横行しているのを、ただ茫然と見まもつていてはならない。われわれは、人間の道を護るために、何としても、彼等の胸から、有毒な炎を消し去る工夫をしなければならぬ。そして、そのために必要なものはまさしく西行の眼である。

争はぬ心となりて野を行くや木々ことごとく日にかがよへり

かにかくに小さきままに生きてあれば天つ光はゆたかなるかも

この二首は、人道の真精神に即せんとするわたくしの心願を歌ったものである。常に人に打克たんとする醜いところを捨てて、地にみなぎる寂光のなかに、小さきままにせずかに自己の道を歩むことこそ、真に人間をして光あらしめる道ではあるまいか。

わたくしは、文覚の情熱と、意力と、荒行との尊さを知らないものではない。ただ、そ

の憤怒に燃ゆる胸と眼との赤黒い炎に、いいしれぬ憂いを感じるものである。

同時に、わたくしはかたく信ずる。——怒れる者の心はほんとうの強さを持たない。静寂のなかに、無限の抱擁力と暖かさをたたえた西行の眼こそは、ついに世に打克つであらう。

西行の眼を持つ青年がいたるところに現われ、そして、それぞれの家庭と郷土において、静かに文覚の徒の眼を見つめることを、私は心から祈ってやまないものである。

青空文庫情報

底本：「仏教の名随筆 2」国書刊行会

2006（平成18）年7月10日初版第1刷発行

底本の親本：「下村湖人全集5」国土社

1975（昭和50）年10月25日初版発行

初出：「青年」

1933（昭和8）年6月

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2018年1月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

西行の眼

下村湖人

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>